広野文芸欄

広野町葉月句会

季題　当季自由句

長梅雨や育つは畦の草ばかり　塩　史子
美しき朝一番の茄子の花
出羽路より母への土産紅の花

万緑の五社山うつす砂防ダム　根本　山水
鮎を焼き友と一晩飲みあかす
大滝の音にも漬かる野天風呂

船頭の歌につき来る夏の鳶　鯨岡　一生
先づけぶり曲げて踊りの輪に入り
梅雨晴や物干しなる程干せり

まどろみの夢に入りくる法師蝉　遠藤健太郎
かなかなを総身に浴びて鍬洗う
読経にも似て境内の蝉時雨

二度三度傘振り梅雨の憂拂ふ　西山　子
一匹の蚊に乱さるる夕餉かな
夏雲の千変万化やまざりき

波音の海靄の奥よりとじきけり　阿部　真生
馬鈴薯の花の紫実り待つ
白熱のパークゴルフや芝青し

姉妹あかずにのぞく金魚玉　山田　基星
川風に流されてゐる糸蜻蛉
雨蛙出窓にかくれのど鳴らす

萱草の欠なるゝ姿なつかしい　酒井　津祢
虎尾草にいくたびも水替えてゐる
万緑の野辺をのこして友逝きぬ

大滝のしぶきをあびる湯治宿　鯨岡　正子
定年なき農の一生杉花粉
青嵐よろけつゝ行く傘寿かな

畦細し一輪灯す夏薊　宮下　純子
紫陽花の雨の夕となりにけり
冷し酒のもてなしありて湯治宿

広野みなづき短歌会八月詠草

（旧仮名使用　五十音順）

長き梅雨終へたる今日を人々のうわさに聞きぬ米の不作を
旧友の母は百歳を越ゆといふ吾が母も世に在りせばと思ふ　猪狩ユリ子

朝の陽がまぶしく映ゆる窓の辺に娘の写真あかず眺むる
孫の顔を想ひて画布に向かへども筆は進まずなやみ深まる　小澤　健次

耳しひの夫との会話難儀なり特製手話のとみに増したり
老い二人の会話の声に驚きて何事なりと息子は顔を出す
単純な大根おろしも脳活性とききて我が家の献立整ふ　木村ミヨ子

生きるとは辛い運命と思ひつつ耐えゆくことの尋きを思ふ
ちっぽけな感傷抱き生きてをり厨ごとなどほどほどなして
早朝に心しずめて誦しをりぬただひたすらに般若心経を　菅原　泰郎

年どしのお盆詣でなつかしむ亡父の郷里の白石の町
起き出でて仰げば今日も良き日和配達前の気持引き締む　田副　耕一

背戸山の霧にこもりて聞こえくるひぐらしの声ほそぼそとして
梅雨小雨静かなりせば旅立ちし心にしむる一つ思ひ出　新田　里子

雨しぶき視界せばまるケーブルカーの行く手にそぞろ雪渓せまる
黒ぐろと崩れ落ちたる跡見ゆる雨後の崖道バスは徐行す
修行後は本寺の住持になるといふ若き僧らの読経の声
起きぬけににっこり笑えとマニュアル本亡母に似て来し鏡の笑顔　山内　洋子

心処に燦とかがやく思ひ出か友ありて祝はる米寿の宴に
家ごもり呆たる吾に賜はれる友らの篤きみ心づかひ
思ひ出とう心の蔵にまた一つ米寿祝はる燦たる事実
溢れくる篤き思ひに言葉なくつつしみて膳の箸をいただく
無意識に過しきたりて「米寿」とふ言葉しみらに意識に根づく
名湯に友ら出でゆきし室に一人残り噴きくる思ひ「良き師良き友」
残世のいくばくはしらず露の世を心つつしみ生きねばならぬ
送られて帰り来し夜をしみじみと佳き日の思ひペンにしたたむ　山口　歌子